

留岡幸助の古谷久綱宛書簡

杉 井 六 郎

同志社の運営・管理ははじめ社員会によってきめられていたが、明治三十一年十二月二十八日、徴兵猶予の特典をえようとした同志社綱領の削除問題の責任をとって、横井時雄社長以下社員十二名が総辞職し、その後新社員候補者十二名が選出され、翌三十二年三月十一日臨時社員会が開かれ、綱領削除の条項を復活し、同志社を財団法人の組織に改め、「同志社財団寄付行為証」を定め、従来社員会と称していたのを改め、理事会とした。したがって社員は理事といわれるようになった。いわば現在の理事会の素型が明治三十二年三月以降出来あがったのである。

この理事の職責に理事会発足のときから明治四十四年三月まで当たった一人に留岡幸助がいる。

留岡幸助は、周知のようにわが国社会福祉事業の先達であり、同志社の一理事としての学校の運営・管理にかかわるかれの心事をこゝと改めて問題にすることは、その論ずべき焦点をことさらにはずした取り上げ方と思われぬふしもあるが、私立の学園が私立としての矜持をもって、その特性を十分に生かし、背筋を立てた学園の運営を図ろうとしたこと、また、そうした校友同窓の母校に寄せる思いをこの際十分に温めることは現在の同志社にとってはそれほど閑事ではないと思われる。

かれは岡山の高梁の出身であり、明治十八年に入學し、二十一年六月別科神学科を卒業した。卒業後かれは丹波第一基督教会牧師となり、二十四年五月北海道空知集治監教諭師

として赴任するまで、広範な丹波路の伝道に従事した。二十七年五月から二年間アメリカに留學し、監獄改良、免囚保護に関する実地の勉強につとめ、帰国して『感化事業の発達』（明治三十年一月刊）、『模範監獄』（同年八月刊・訳）『慈善問題』（明治三十一年十月刊）など相ついで発刊して、わが国社会福祉事業における学術的慈善の先鞭をつける一方、三十年二月からは靈南坂教会牧師となり、翌年九月には巢鴨監獄教諭師となり、三十二年五月靈南坂教会牧師を辞任後、警察監獄学校教授となり、同年十一月には東京府北豊島郡巢鴨村巢鴨に家庭学校を創設し、わが国における教護事業を創始した。三十三年八月には内務省地方局嘱託となり、爾後家庭学校の運営と併行して地方農村の実態調査のため東奔西走し、地方改良運動に挺身する。大正三年、かれは五十一歳であるが北海道遠軽に家庭学校を創始し、昭和九年二月七十一歳で死ぬまで教護事業に骨身をけずって力を尽くした。

ちょうど横井時雄社長が同志社通則の不易の条項を削除して徴兵猶予の特典をえようとしたさい、かれは『基督教新聞』編集の担当者であり、その紙上に同志社社員会の決議を

非難し、同志社校友に激文をおくり、同志社綱領の改変に猛反対し、また組合教会の死活の問題でもあるとして厳しい姿勢でキャンペーンを行なった。かれが横井時雄らの総辞職のあと、新社員の候補者となり、明治三十二年三月から理事会選出の理事となるのはそのような背景があった。

母校の危機と想って煩多な理事をひきうけた留岡幸助の眼前には、不幸な少年を収容する家庭学校の経営があり、かつまた、内務省囑託としての地方出張にあけくれる仕事がある。積した。

いまその理事をつとめる留岡幸助の同志社に寄せたはげしい思いを、後輩の古谷久綱(明治二十六年普通通学校卒業)にあてた書簡から探ってみよう。

明治38・12・2 封書

表 東京市麹町区永田町二ノ二八 古谷久

綱 (急親展)

裏 東京府北豊島郡巢鴨村家庭学校内 留

岡幸助

巻紙 薄紫下絵 毛筆

拝啓仕候。同志社問題に關しては種々御

高配を辱ふ致し御尽力の結果愈々新理事五名の候補者去る青年会にての東京校友会にて相談一決し、横井(時雄)君も三十年紀念会へ演説の為に御苦勞相成ることに御承諾相成り申候。此度は尊台并に村井(貞之助)君の非常なる御尽力にて斯くも都合よく相纏り候事、全く神が同志社を棄て玉はさること信じ、尊台の御尽力を多謝致すことに候。

就ては来る七日午前同志社にて臨時理事会を開催、新理事諸君を御歡迎申す決議を可致内相談まとなり居候得者御多用の所御繰合せは六ヶ敷からんも枉けて七日の朝迄に京都へ御出向なし被下度願上候。

本式より申きは同志社より御願申す可きなれと、便宜の為に在京理事へ此事依頼し来り候間、右御含みをき被下度候。

過般は御高侍に与り緩談を遂げ候事深く御礼申上候。其後小生も他行、尊台にも海外へ御苦勞相成り行違いて御礼も不申上礼致候。御海容被下度候。草々不具。

明治三十八年十二月二日 留岡幸助

古谷久綱様 玉机下

ここに見られる新理事五名とは宮川経輝、

原田助、小野英二郎、村井貞之助、古谷久綱であり、かれらの理事会加入の経緯は従来『同志社五十年史』、『同志社九十年小史』にはことあらためて叙述されていない。しかし、留岡幸助が社友伊藤博文が日露戦後の朝鮮問題にいま新たに韓国統監となり、その秘書をつとめる古谷久綱に理事の職責を依托する同志社問題は、そんな閑事業であるうはずがない。『明治三十七年度同志社報告』を見ると、理事堀貞一の満期退職後、理事会は補欠として原田助を選挙し、就任を依頼したが本人の承諾をえず、三十七年五月に再投票し、十月決戦投票の結果宮川経輝が多数をえて、宮川に当選の事を通知し承諾を求めたところ、三十八年三月末にいたっても応答がえられないという事態が報ぜられ、同志社の運営に何か円滑を欠く憾が潜在していたことを伝えていた。留岡幸助が同志社の運営に校友同窓が力を尽くすことと、その力をあわせることを強く求めていた事情をうかがうことができるとしてよいであろう。

明治43・3・17 封書

表 赤坂区檜町三番地 古谷久綱(拜復)

裏 東京府北豊島郡巣鴨村家庭学校内 留

岡幸助

巻紙 毛筆

拜啓仕候。御懇切なる御書状難有鳴謝候。

諸先輩の御親切は辱なく受納致し候も、小生が理事として何等同志社に益なきを認め候間、此度は是非に御辞退申上度、社長へは長文の手紙差出しをき候得共、老台の御尽力によりて是非に小生の願意の達するやう御高配被下度候。「己れを知れ」と申すことは常に小生の考へ居る語なれば何分よろしく御取計らひ被下度候。実は本日にても尊台に御目にかゝり度候得共、昨夜半愛知県より帰宅、明日は長野県へ出張、廿五六日ならては帰り不申候やうのこと也。欠礼仕候為に今回の理事会へもよう出席致し兼候。草々不具。

三月十七日

留岡幸助

古谷久綱様 玉机下

留岡幸助の理事会選出としての理事は明治四十一年四月満期となり、その年十一月内国社友選出理事となり当時まだその任期を余していた。愛知・長野への出張は内務省囑託とし

ての繁務を示し、かれは「己れを知れ」と理事職責への自省を顧みて辞職を申し出ている。

明治44・3・12 封書

表 赤阪区檜町三番地 古谷久綱（親展）

裏 巣鴨家庭学校 留岡幸助

巻紙 毛筆

拜啓仕候。原田社長も長らく滞米の所好土産を以て帰られ候事誠に喜ばしきことにて候。段々内外共に足並揃ふて進み候事御同慶に堪へさることに候。

就ては小生こと昨年より申居り候理事職辞任のこと愈々本日原田社長宛にて同志社へ向け辞表提出致しをき候。その理由は決して不快不満にて辞職致すことに無之候。同志社の前途を望めば向上発展致さねばならぬこと多く、小生の如き金力及その他の能力なきものが要職を汚すへきものにあらす、他を顧みれば新進の同窓諸君にして理事に適當の人物多く、小生は今日此等の人にその位置を譲る方同志社の為によろしかるへしと信候。牧野（虎次、水崎「基一」）兩氏へは此書と共に小生の後任には近藤賢二君か二宮峰男君を撰んで呉れるやう申送り

をき候。実は老兄とは親しき間柄故参上辞任の次第申述ふべくの所、明朝一番にて愛知県へ出張致さねはならず、寸暇殆んど無之、只今も外出より帰宅、深更に及びて此書を認め候やうのことに候。他意なき辞職なれば老兄等御賛成被下やう願上候。何れ拝顔の上委細可悉なれとも徳富（猪一郎）先生と老兄丈には小生の真意申述へをき候。不悪御諒察被下度候。草々不具。

三月十二日夜十二時

留岡幸助

古谷老台 座下

『明治四十四年度同志社報告』によると、かれの希望のように近藤賢二が理事に選ばれ、かれの理事としての職責はとかれた。その年、同志社は翌年四月を期して同志社大学を開設することを理事会は決議する。

同志社を大学とすることの骨身をけずる努力の実態は、なおその他多くの関係文書を渉猟する要があるが、現在『留岡幸助著作集』（全五巻 同志社大学人文科学研究所編 同朋社出版）の作業を進めるなかで、先人の足跡を偲ぶよすがとして、そこに掲載する予定の書簡の一端を紹介した。

（大学人文科学研究所専任研究員）

デントンハウス の 片 鱗



中 村 貢

デントン先生が明治四十二年から、逝去された昭和二十二年までの約三十八年間住まわれたデントンハウスと呼ばれた建物は、先生の没後約十一年間生き延び、昭和三十三年の夏、新心齋建築のために撤去された。

多くの校友、同窓にとっては限りなくなつて、また、海外からの観光客のメッカとさえ言われたこのハウスが消えたことは、時代の流れとはいえ、惜しいことであつたが、その際、先生の居間でもあり、客間でもあり更に終焉の場所ともなつた食堂と呼ばれた一室を将来建てられる寮舎の一部に再現して長く記念するために、必要な建具・備品の類を、当時あつた栄冠寮の土蔵に収蔵した。このことに關しては、「同志社九十年小史」一六七頁にも記載されている。

しかしどうしたことか、その貴重品はいつ

の頃にか消滅してしまつた。誰にたずねてもはっきりした答えは得られない。おそらく栄冠寮が売却された時点で、何かの手違いでスクラップとして破棄されてしまつたのかも知れない。備品の中で、デビス博士が明治の初年に汽船の煙突を横切りにして作らせたという楕円形の巨大なストープなど、忘れ難いものも多いが、一体どこへ捨てられたのであろう、惜しいことである。

現在女子大学に保存されている多少の家具、什器などや、蔵書の類は別として、建物自体を偲ばせるようなものは全く皆無といつてもよからう。それに不思議なことは建物の全容を示すような絵画や写真もほとんど見当たらない。一昨年秋出版された銅銀松雄氏の著「デントン先生と警察官」の表紙とカバーに、前総長住谷悦治先生の「崩されつつある

デントンハウス」と書かれたスケッチの色刷りがあるが、あれは非常に貴重な資料であると思う。

あのハウスがこわされている時、私は、何か一つかたみとも言うべきものが欲しかった。それで、当時の女子大学長瀧山徳三先生に、ハウスの西端の料理室から二階の先生の寝室に通じる狭い曲がった階段の片側に打ちつけられた三メートルばかりの古い竹がもたらえないかと頼んだ。それはただ平凡な竹の穂ではあるが、長い間キチンから立ち昇る油煙やデントン先生や星名先生の手垢(?)などで茶褐色となり、一見燦竹のような感じであつた。瀧山先生は、早速私の願いを聞き入れて、その竹をわざわざ学長室に運ばせて下さつた。当時私は何に使用するというあてもなかつたが、一・二年の後書齋の模様替をした際、ふと思いついて、大工にこの竹の使い道を相談したところ、彼は早速一間半のたれ壁の下端を飾る横樺に使ってくれた。デントン先生や星名先生が日に幾回となくこの竹にすがつて急な階段を上り下されたことを思うと、これは私にとってまことに得難い宝物であることはもちろんであるが、同時に二度と見ることのできぬデントンハウスの歴史的片鱗としても大切に保存したいものである。

(元女子大学教授)